

# **intra-mart WebPlatform**

## **Ver.7.2**

---

---

**IM-共通マスタ 拡張インポートバッチ 2 利用ガイド**

**2014/12/26 第1版**



<< 變更履歷 >>

變更年月日	變更內容
2014/12/26	初版



## &lt;&lt; 目次 &gt;&gt;

1	概要	3
2	拡張インポートバッチについて	4
2.1	拡張インポートバッチの位置づけ	4
2.2	標準の同期との対比	4
2.3	一期間化対象のエンティティ	6
2.4	チェックリスト	6
3	準備	7
3.1	バッチ設定の登録	7
3.1.1	バッチ設定ファイルの作成	7
3.1.2	バッチ設定をインポート	8
3.1.3	バッチの確認	8
3.2	plugin.xml の修正	9
3.3	バックアップ	9
3.4	初期状態生成	10
3.4.1	設定ファイル	10
3.4.2	初期状態生成の実行	10
4	実行	11
4.1	バックアップ	11
4.2	設定ファイル	11
4.2.1	エクスポート設定ファイル	12
4.2.2	インポート設定ファイル	13
4.2.3	一部のエンティティのみ同期する例	14
4.3	インポートの実行	14
5	制限事項	15
5.1	アプリケーション共通マスタが一期間の状態になっていること	15
5.2	関連するエンティティの復帰処理を行いません	15
5.2.1	関連するエンティティの復帰処理について	15
5.2.2	復帰処理への対応方法	17



# 1 概要

拡張インポートバッチは、IM-共通マスタからアプリケーション共通マスタへの同期を行うバッチ処理です。

アプリケーション共通マスタの履歴を削除することにより、同期の処理を簡略化し、それによりパフォーマンスの改善を図った同期処理です。

簡略化したことにより、使用するにあたっていくつかの制限事項があります。本拡張インポートバッチの最も大きな制限は、アプリケーション共通マスタのユーザ、会社組織の期間を一期間化することです。

アプリケーション共通マスタのユーザ、会社組織の履歴情報を必要としない運用であれば適用できます。詳しい制限については「5 制限事項」を参照してください。

本ドキュメントでは、拡張インポートバッチの導入方法と使用方法について説明します。

また、使用する際の制限事項についても記述しています。これらの制限を踏まえて拡張インポートバッチを使用してください。

## ※用語解説

%Application Runtime%

Application Runtime をインストールしたディレクトリ

%Storage Service%

Storage Service をインストールしたディレクトリ

## 2 拡張インポートバッチについて

拡張インポートバッチは、IM-共通マスタのユーザと会社組織の情報をアプリケーション共通マスタへ同期させるバッチであり、標準の同期の代わりに使用します。

拡張インポートバッチを使うことにより、IM-共通マスタへのインポート時間を短縮できます。

IM-共通マスタのインポートに時間がかかるなどの場合、この拡張インポートバッチでの運用を検討してください。

この拡張インポートバッチは intra-mart WebPlatform Ver.7.2 Patch08 より利用できます。

### 2.1 拡張インポートバッチの位置づけ

IM-共通マスタからアプリ共通マスタへの同期を行うと長期間運用することにより期間データが増加した際、同期処理に時間がかかるようになっていきます。

このような場合の対応として、標準の同期処理の代わりに拡張インポートバッチを利用することが候補になります。

この拡張インポートバッチでは履歴を削除した状態で同期することにより、同期処理時間の短縮をしています。

アプリケーション共通マスタの履歴を削除するので、履歴を必要としているシステムではこの拡張インポートバッチを適用できません。

アプリケーション共通マスタの履歴を削除した状態で運用してもシステムとして問題が無いのであれば、この拡張インポートバッチを利用できます。

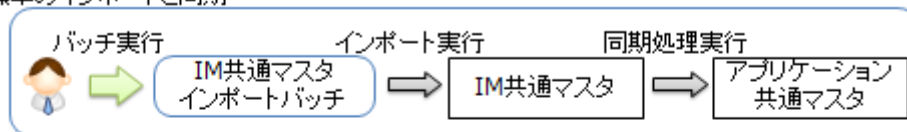
### 2.2 標準の同期との対比

標準インポートでは、IM-共通マスタのインポートバッチを実行すると、IM-共通マスタにデータをインポートしながらアプリケーション共通マスタへ同期します。

これに対して、拡張インポートバッチを使う場合は、IM-共通マスタのインポートバッチでアプリケーション共通マスタへ同期をしないように設定して、IM-共通マスタへインポートします。

その後、拡張インポートバッチを使って、履歴を削除した状態のアプリケーション共通マスタへ同期処理を実行します。

標準のインポートと同期



拡張インポートバッチを利用したインポートと同期

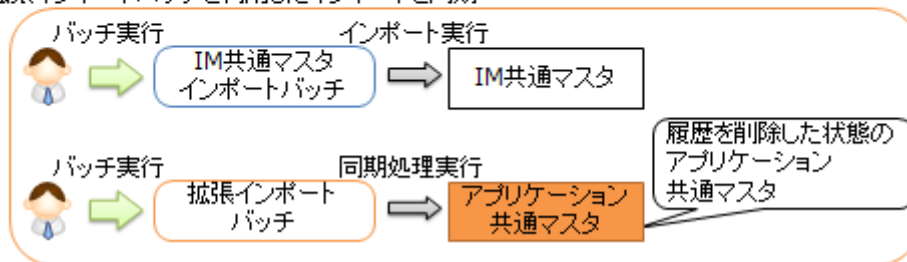


図 2-1 標準インポートと拡張インポートバッチを利用したインポートの概略



以下は、標準のインポートと拡張インポートの機能比較した表です。

拡張インポートバッチのメリットは、標準の同期と比べて処理速度が速いことです。

デメリットはアプリケーション共通マスタを一期間にして履歴を持つことができない制限があることです。

	標準同期	拡張インポート バッチ	備考
IM-共通マスタインポート 中に同期を行う	○	×	標準の同期では、IM-共通マスタインポート中に同期処理を行っていましたが、拡張インポートバッチでは、別のバッチで同期を実行させます。
アプリケーション共通マスタの期間化	○	×	拡張インポートバッチでは、IM-共通マスタの指定した日付のスナップショットの状態を同期します。アプリケーション共通マスタは一期間のみ保持します。
設定ファイル	○	×	拡張インポートバッチ用の設定ファイルを使用します。
処理時間	普通	速い	拡張インポートバッチのアプリケーション共通マスタは、期間を一つしか持たないので、同期処理にかかる時間が短くなっています。

表 2-1 標準インポートと拡張インポートとの対比表

## 2.3 一期間化対象のエンティティ

この拡張インポートでは、アプリケーション共通マスタのユーザと会社組織を一期間化します。

一期間化するエンティティとテーブルは以下の通りです。

太字のテーブルが一期間化によりデータが変更、削除されるテーブルです。

エンティティ	テーブル
ユーザ	b_m_user_b <b>b_m_user_t</b> <b>b_m_user_t_i</b>
組織	b_m_department_b <b>b_m_department_t</b> <b>b_m_department_t_i</b>
会社構成バージョン	<b>b_m_company_version_b</b>
組織内包	<b>b_m_department_inclusion_b</b>
役職	b_m_company_post_b <b>b_m_company_post_t</b> <b>b_m_company_post_t_i</b>
組織所属	b_m_department_attach_b <b>b_m_department_attach_t</b>
主所属	b_m_department_main_b <b>b_m_department_main_t</b>
組織分類所属	b_m_company_category_b <b>b_m_company_category_t</b>

表 2-2 一期間化するエンティティとテーブル

## 2.4 チェックリスト

IM-共通マスタ、アプリケーション共通マスタの運用についてのチェックリストです。

以下の項目が全て「YES」の場合、この拡張インポートバッチを適用できます。

- アプリケーション共通マスタの履歴情報を必要としない。
- IM-共通マスタ上で無効状態(論理削除状態)のデータを有効化するインポートは行わない。  
有効化への変更については、「5.2 関連するエンティティの復帰処理を行いません」を参照してください。

## 3 準備

拡張インポートバッチを実行する準備として、バッチ設定を登録して拡張インポートバッチを実行できるようにします。

標準の同期処理を無効化し、既存のアプリケーション共通マスタのユーザと会社組織のデータの履歴情報を削除し、一期間化します。

### 3.1 バッチ設定の登録

拡張インポートバッチの設定ファイルを配置し、バッチ設定をインポートして本バッチを実行できるようにします。

ここでは、アクセスセキュリティのインポートを利用して拡張インポートバッチを登録する方法について説明します。

アクセスセキュリティのインポートの詳細については、「グループ管理者 操作ガイド」の「1.5.8 アクセスセキュリティのインポート」を参照してください。

また、バッチ設定ファイルの詳細については、「アクセスセキュリティ仕様書」を参照してください。

#### 3.1.1 バッチ設定ファイルの作成

本同期処理を実行するためには、バッチを登録する必要があります。

以下の内容のファイルを作成し、「%Storage Service%/storage/」配下に配置します。

ファイル名は任意ですが、ファイルのエンコードは **UTF-8** にしてください。

```
<intra-mart>
  <batch>
    <batch-id>OneTermImportUser</batch-id>
    <batch-name>一期間ユーザ同期インポート</batch-name>
    <programming-language>JAVA</programming-language>
    <program-path>jp.co.intra_mart.system.master.batch.OneTermUserBatchImporter</program-path>
    <valid>>false</valid>
  </batch>
  <batch>
    <batch-id>OneTermImportCompany</batch-id>
    <batch-name>一期間会社組織同期インポート</batch-name>
    <programming-language>JAVA</programming-language>
    <program-path>jp.co.intra_mart.system.master.batch.OneTermCompanyBatchImporter</program-path>
    <valid>>false</valid>
  </batch>
  <batch>
    <batch-id>OneTermInitUser</batch-id>
    <batch-name>一期間ユーザ 初期状態生成</batch-name>
    <programming-language>JAVA</programming-language>
    <program-path>jp.co.intra_mart.system.master.batch.OneTermUserInitializerBatch</program-path>
    <valid>>false</valid>
  </batch>
  <batch>
    <batch-id>OneTermInitCompany</batch-id>
    <batch-name>一期間会社組織 初期状態生成</batch-name>
    <programming-language>JAVA</programming-language>
    <program-path>jp.co.intra_mart.system.master.batch.OneTermCompanyInitializerBatch</program-path>
    <valid>>false</valid>
  </batch>
</intra-mart>
```

batch-id、batch-name は任意の値を設定できます。

以下では、program-path が OneTermUserBatchImporter のバッチを一期間ユーザ同期インポート、OneTermCompanyBatchImporter のバッチを一期間会社組織同期インポート、OneTermUserInitializerBatch のバッチを一期間ユーザ 初期状態生成、OneTermCompanyInitializerBatch のバッチを一期間会社組織 初期状態生成と呼びます。

### 3.1.2 バッチ設定をインポート

ログイングループ管理者でログインします。

メニューの「ログイングループ管理 - アクセスセキュリティ情報入出力 - インポート」を選択し、インポート画面を表示します。

項目「バッチ」のチェックボックスを ON にし、ファイルのテキストボックスに「3.1.1 バッチ設定ファイルの作成」で作成したファイル名を記述します。

インポートボタンを押下し、バッチ設定をインポートします。

### 3.1.3 バッチの確認

ログイングループ管理者でログインします。

メニューの「ログイングループ管理 - バッチ設定」を選択し、バッチ処理画面を表示します。

バッチ一覧部分に、「3.1.1 バッチ設定ファイルの作成」で作成したファイルの batch-id と batch-name のバッチがあることを確認します。

一期間ユーザ同期インポート、一期間会社組織同期インポート、一期間ユーザ初期状態生成、一期間会社組織初期状態生成の 4 つのバッチがリストに載っていれば、バッチのインポートは成功です。

## 3.2 plugin.xml の修正

IM-共通マスタからアプリケーション共通マスタへの標準の同期処理を無効化します。

IM-共通マスタからアプリケーション共通マスタへの標準の同期処理はプラグインとして登録されていますので、下記を参考に plugin.xml 中の同期の記述部分をコメントアウトします。

対象となる plugin.xml は、「%Application Runtime%/plugin/jp.co.intra\_mart.standard/plugin.xml」です。

extension point 「jp.co.intra\_mart.foundation.master.accessor.company」と「jp.co.intra\_mart.foundation.master.accessor.user」の SynchronousCompanyListener と SynchronousUserListener の部分をコメントアウトします。

```

<extension
  point="jp.co.intra_mart.foundation.master.accessor.company" >
  <accessor
    name="standard"
    id="jp.co.intra_mart.standard"
    version="7.2"
    rank="1" >
    <reader class="jp.co.intra_mart.system.master.company.impl.StandardCompanyAccessor" />
    <writer class="jp.co.intra_mart.system.master.company.impl.StandardCompanyAccessor" />
    <listener class="jp.co.intra_mart.system.master.company.impl.StandardCompanyListener" />
  <!--
    <listener class="jp.co.intra_mart.system.master.sync.SynchronousCompanyListener" />
  -->
    <importer category="standard" class="jp.co.intra_mart.system.master.company.impl.StandardCompanyImporter" />
    <exporter category="standard" class="jp.co.intra_mart.system.master.company.impl.StandardCompanyExporter" />
  </accessor>
</extension>

<extension
  point="jp.co.intra_mart.foundation.master.accessor.user" >
  <accessor
    name="standard"
    id="jp.co.intra_mart.standard"
    version="7.2"
    rank="1" >
    <reader class="jp.co.intra_mart.system.master.user.impl.StandardUserAccessor" />
    <writer class="jp.co.intra_mart.system.master.user.impl.StandardUserAccessor" />
    <listener class="jp.co.intra_mart.system.master.user.impl.StandardUserListener" />
  <!--
    <listener class="jp.co.intra_mart.system.master.sync.SynchronousUserListener" />
  -->
    <importer category="standard" class="jp.co.intra_mart.system.master.user.impl.StandardUserImporter" />
    <exporter category="standard" class="jp.co.intra_mart.system.master.user.impl.StandardUserExporter" />
  </accessor>
</extension>

```

## 3.3 バックアップ

「intra-mart WebPlatform セットアップガイド」の「11.3 バックアップ」を参考に、バックアップを行ってください。

## 3.4 初期状態生成

アプリケーション共通マスタのユーザと会社組織を一期間化するために、一期間初期状態生成バッチを実行します。

デフォルトでは、現在日付を含む期間だけ残して他は削除します。設定ファイルに対象日付を記述することにより残す期間を指定できます。

一期間化すると、期間は開始日が 1900/01/01、終了日が 3000/01/01 になります。

### 3.4.1 設定ファイル

設定ファイルに対象日付を記述することにより、一期間化する期間を決定することができます。

設定ファイルの配置場所とファイル名は、

```
%StorageService%/storage/system/im_master/config/altsync/oneterm_initializer.properties
```

です。

対象日付は

```
target_date=2000/01/01
```

のように、yyyy/MM/dd 形式で記述してください。

target\_date が無い場合は、現在日付で一期間化します。

### 3.4.2 初期状態生成の実行

ログイングループ管理者でログインします。

メニューの「ログイングループ管理 - バッチ設定」を選択し、バッチ処理画面を表示します。

「一期間ユーザー 初期状態生成」、「一期間会社組織 初期状態生成」を実行し、アプリケーション共通マスタのユーザーと会社組織を一期間化します。

## 4 実行

IM-共通マスタからアプリケーション共通マスタへの同期を実行する前に、アプリケーション共通マスタの期間は一期間化された状態にいる必要があります。

この拡張インポートバッチを初めて実行する場合は、同期を実行する前に初期状態生成バッチを実行し、一期間化します。初期状態生成については、「3.4 初期状態生成」を参照してください。

バックアップを取ってから、拡張インポートバッチを実行してください。

### 4.1 バックアップ

「intra-mart WebPlatform セットアップガイド」の「11.3 バックアップ」を参考に、バックアップを行ってください。

### 4.2 設定ファイル

設定ファイルにより、IM-共通マスタのどの日にちの情報を同期するか、同期するデータの種類(組織、役職、所属など)を選択することができます。

デフォルトの設定では、同期する日にちは現在日付、同期するデータの種類は全て(ユーザ、組織、内包、役職、所属、組織分類所属)になっています。

拡張インポートバッチでは、内部で IM-共通マスタのデータをエクスポートし、アプリ共通マスタへインポートしています。

この時の設定ファイル(csv エクスポートと csv インポート)の内容は、IM-共通マスタの標準インポートの設定ファイル同じです。

内容については「IM-共通マスタ インポート・エクスポート仕様書」を参照してください。

設定ファイルの配置場所とファイル名は以下の通りです。

設定ファイルの配置場所	%Storage Service%/storage/system/im_master/config/altsync
エクスポート設定ファイル	oneterm_export_config.xml
インポート設定ファイル	oneterm_import_config.xml

### 4.2.1 エクスポート設定ファイル

エクスポート設定ファイル(oneterm\_export\_config.xml)は、ターゲットファイル、基準日と文字コードを必要に応じて設定します。

各項目は以下のように設定してください。

項目名	タグ名	説明
処理名	name	任意の値を設定してください。
フォーマット	format	「csv」を指定してください。
ターゲットファイル	file	type には user、department、inclusion、post、attach-user、attach-item を指定してください。 また、インポート設定ファイルのターゲットファイルとあわせてください。 詳細は「IM-共通マスタ インポート・エクスポート仕様書」の「6.2.3 CSV でのデータファイル指定方法」を参照してください。
基準日	date	どの期間のデータを同期するかを決定するための基準日を指定します。 省略した場合、現在日で同期します。
文字コード	encoding	インポート設定ファイルの文字コードとあわせてください。

表 4-1 エクスポート設定ファイルの項目

通常の運用では、基準日を変更する程度になります。

デフォルトの設定は以下です。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<app-master-export>
  <user-export>
    <format>csv</format>
    <encoding>UTF-8</encoding>
    <name>name</name>
    <file type="user">im_master/temp/altsync/user.csv</file>
  </user-export>

  <company-export>
    <format>csv</format>
    <encoding>UTF-8</encoding>
    <name>name</name>
    <file type="department">im_master/temp/altsync/department.csv</file>
    <file type="inclusion">im_master/temp/altsync/inclusion.csv</file>
    <file type="post">im_master/temp/altsync/post.csv</file>
    <file type="attach-user">im_master/temp/altsync/attach-user.csv</file>
    <file type="attach-item">im_master/temp/altsync/attach-item.csv</file>
  </company-export>
</app-master-export>
```



## 4.2.2 インポート設定ファイル

インポート設定ファイル(oneterm\_import\_config.xml)は、ターゲットファイル、文字コードを必要に応じて設定します。

各項目は以下のように設定してください。

項目名	タグ名	説明
処理名	name	任意の値を設定してください。
フォーマット	format	「csv」を指定してください。
ターゲットファイル	file	type には user、department、inclusion、post、attach-user、attach-item を指定してください。 また、エクスポート設定ファイルのターゲットファイルとあわせてください。 詳細は「IM-共通マスタ インポート・エクスポート仕様書」の「6.2.3 CSV でのデータファイル指定方法」を参照してください。
開始日、終了日	start-date end-date	使用しません。
文字コード	encoding	エクスポート設定ファイルの文字コードとあわせてください。

表 4-2 インポート設定ファイルの項目

通常の運用では、このままで使用できます。

デフォルトの設定は以下です。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<app-master-import>
  <user-import>
    <format>csv</format>
    <encoding>UTF-8</encoding>
    <name>name</name>
    <file type="user">im_master/temp/altsync/user.csv</file>
  </user-import>

  <company-import>
    <format>csv</format>
    <encoding>UTF-8</encoding>
    <name>name</name>
    <file type="department">im_master/temp/altsync/department.csv</file>
    <file type="inclusion">im_master/temp/altsync/inclusion.csv</file>
    <file type="post">im_master/temp/altsync/post.csv</file>
    <file type="attach-user">im_master/temp/altsync/attach-user.csv</file>
    <file type="attach-item">im_master/temp/altsync/attach-item.csv</file>
  </company-import>
</app-master-import>
```

### 4.2.3 一部のエンティティのみ同期する例

ここでは、IM-共通マスタで所属のみを変更した場合に、全て同期するのではなく所属のみ同期しようとする場合を例にあげて説明します。

特定のエンティティのみを同期するには、エクスポート設定ファイル、インポート設定ファイルの `file` の項目にそのエンティティのみを指定します。

ここでは所属のみを出力するので、`user-export`、`user-import` は記述せず、`company-export`、`company-import` の `file` には `attach-user` のみを指定します。

以下は所属のみを同期する場合の設定ファイルの例です。

エクスポート設定ファイル(`oneterm_export_config.xml`)

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<app-master-export>
  <company-export>
    <format>csv</format>
    <encoding>UTF-8</encoding>
    <name>name</name>
    <file type="attach-user">im_master/temp/altsync/attach-user.csv</file>
  </company-export>
</app-master-export>
```

インポート設定ファイル(`oneterm_import_config.xml`)

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<app-master-import>
  <company-import>
    <format>csv</format>
    <encoding>UTF-8</encoding>
    <name>name</name>
    <file type="attach-user">im_master/temp/altsync/attach-user.csv</file>
  </company-import>
</app-master-import>
```

## 4.3 インポートの実行

ログイングループ管理者でログインします。

メニューの「ログイングループ管理 - バッチ設定」を選択し、バッチ処理画面を表示します。

「一期間ユーザ同期インポート」、「一期間会社組織同期インポート」を実行し、アプリケーション共通マスタのユーザと会社組織を同期します。

ユーザと会社組織の両方を同期させる場合には、ユーザ、会社組織の順にバッチを実行してください。

## 5 制限事項

このインポートを実行するには、以下の制限があります。インポートを実行する前に、以下の制限に違反していないことを確認してください。

### 5.1 アプリケーション共通マスタが一期間の状態になっていること

アプリケーション共通マスタが一期間の状態でインポートを行ってください。

一期間の状態にするためには、初期化状態生成バッチを実行してください。初期化状態生成バッチについては、「3.4 初期状態生成」を参照してください。

### 5.2 関連するエンティティの復帰処理を行いません

拡張インポートでは関連するエンティティの復帰処理を行わないので、拡張インポートのエクスポート、インポート設定ファイルにはユーザ、組織、内包、役職、所属、分類所属を設定してください。

組織のみを設定するなど、一部のエンティティのみを同期させる場合は、該当エンティティが無効化から有効化の状態になることが無いことを確認してください。

無効化から有効化の状態にしているエンティティがある場合は、全てのエンティティ(組織、内包、役職、所属、分類所属)を設定してください。

デフォルトではユーザ、組織、内包、役職、所属、分類所属が設定されています。

#### 5.2.1 関連するエンティティの復帰処理について

標準インポートでは、IM-共通マスタ上で、無効(論理削除状態)だったエンティティをインポートで有効化するとき、それに関連するエンティティも有効化しています。

表 5-1 では、対象となるエンティティを復帰させた場合、関連するエンティティを復帰させる処理を行うかどうかを、標準のインポートでの同期処理と拡張インポートの同期のそれぞれに対して表しています。

エンティティ	関連するエンティティ	標準の同期処理	拡張インポートの同期処理
ユーザ	所属	復帰あり	復帰なし
組織(会社)	組織	復帰あり	復帰なし
	内包	復帰あり	復帰なし
	役職	復帰あり	復帰なし
組織	内包	復帰あり	復帰なし
	所属	復帰あり	復帰なし
	組織分類所属	復帰あり	復帰なし
内包	なし	-	-
役職	所属(所属役職)	復帰あり	復帰あり
所属	所属役職	復帰あり	復帰あり

表 5-1 復帰させるエンティティとそれに関連するエンティティの表

例) 標準のインポートと同期処理における復帰

組織インポートで組織を有効化した場合、それに関連した所属も有効化して同期します。

標準のインポートの同期処理では、インポート前の状態(図 5-1)に組織を有効化するインポートを行うと、図 5-2 の状態になります。組織が有効になったことにより、所属が有効として扱われ、組織の同期と共に、所属も有効にして登録しています。

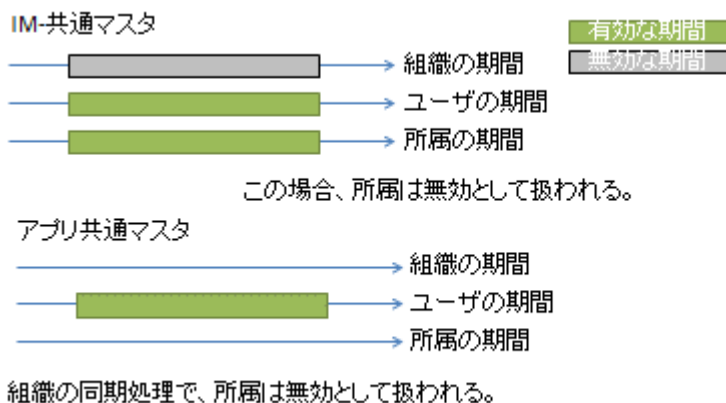


図 5-1 組織インポート前の状態

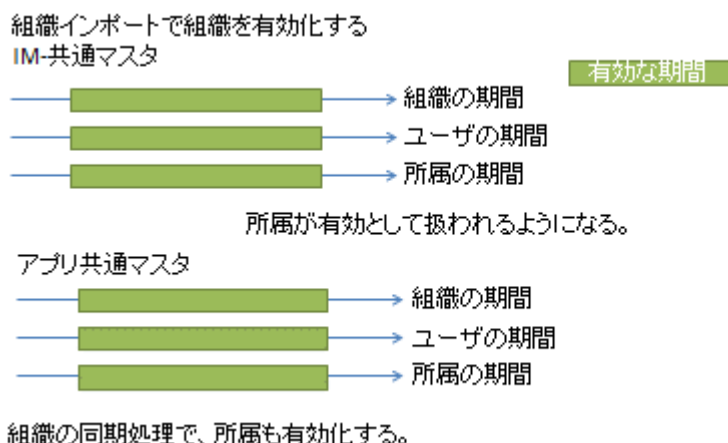


図 5-2 組織インポート後の状態

## 5.2.2 復帰処理への対応方法

拡張インポートでは、表 5-1で「復帰なし」となっているエンティティを無効から有効にする場合、それに関連するエンティティは復帰しません(有効になりません)。

復帰処理の代替として、関連するエンティティの csv データを用意してインポートする必要があります。

例) 組織を有効にする場合

組織を有効にする場合、その組織に関連する内包と所属、組織分類所属のデータを csv ファイルに追加して、同時にインポートします。

ここでは、インポート前の状態(図 5-3)に組織を有効化のインポートを行い、インポート後の状態(図 5-4)にするために用意する csv データについて説明します。

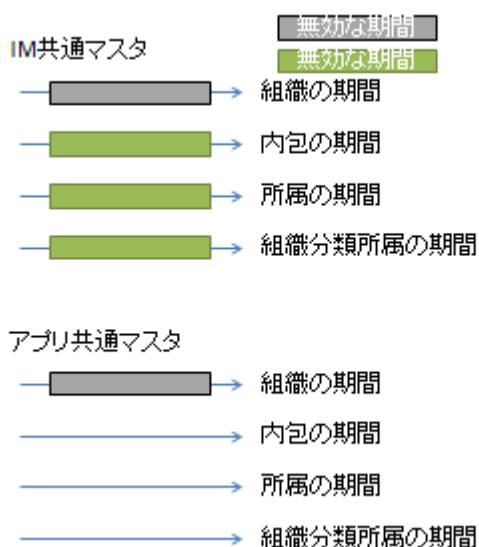


図 5-3 インポート前の状態

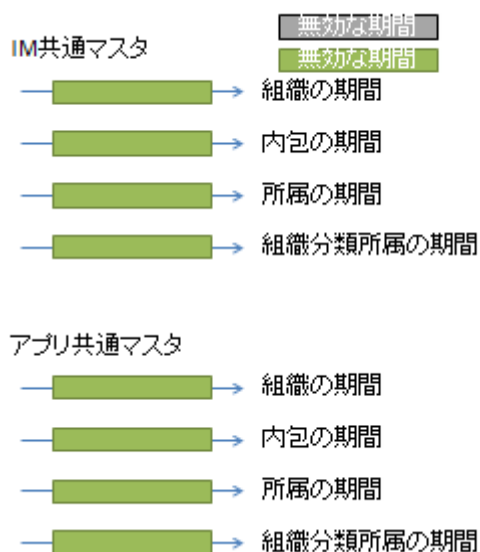


図 5-4 インポート後の状態

組織を有効化すると、IM-共通マスタでは内包、所属と組織分類所属も有効化された状態になるので、アプリ共通マスタでも同じ状態にするために、対応する内包、所属と組織分類所属も同期の対象にさせます。

この場合は、組織だけを同期させるのではなく、内包、所属、組織分類所属も同期させてください。

エクスポート、インポート設定ファイルのターゲットファイルの部分には、組織だけでなく、内包、所属、組織分類所属も記述します。

例) エクスポート、インポート設定ファイルのターゲットファイルに組織のみを記述している場合

組織だけの記述は以下ようになります。

```
<file type="department">im_master/temp/altsync/department.csv</file>
```

上記の記述から、組織だけでなく内包、所属、組織分類所属の記述に変更する場合は、以下のように記述します。

```
<file type="department">im_master/temp/altsync/department.csv</file>  
<file type="inclusion">im_master/temp/altsync/inclusion.csv</file>  
<file type="attach-user">im_master/temp/altsync/attach-user.csv</file>  
<file type="attach-item">im_master/temp/altsync/attach-item.csv</file>
```



intra-mart WebPlatform Ver.7.2  
IM-共通マスタ 拡張インポートバッチ 2 利用ガイド

2014/12/26 第1版

Copyright 2000-2014 株式会社NTT データ イントラマート  
All rights Reserved.

TEL: 03-5549-2821

FAX: 03-5549-2816

E-MAIL: info@intra-mart.jp

URL: <http://www.intra-mart.jp/>